

第二の我れ

▽佛を徒らに拜がんで居るべき時でなく、佛を實現すべき秋が来た。
 ▽佛を信じてゐるとは言ひ乍ら、佛を遠方に發見してコチラから拜がんでゐるやうな有難信仰の時代は過ぎた、それは佛を信じてゐるといふのではなく佛を弄んでゐるのだ、佛を信じてゐるといふのは、佛が我が内に宿り、内より湧く力となつてゐる事だ。
 ▽それでは自分が佛となつてゐる事かといふとそうでは無い、佛が自分となつてゐる下なる姿である。「神と我と一なり」「最早や我れ生けるにあらず、キリスト我に在りて生けるなり」の我であつて、徳本上人の「徳本が佛にはなれぬが佛が徳本になつて下さる」といふ邊の消息である。
 ▽凡夫は仕う寝返り打ても結局凡夫である、而し此凡夫に佛の全分が即して下さる、そして佛の全分を顯現してゆく處に眞の佛も生き、凡夫も生けるのではあるまいか。
 ▽凡夫が單なる凡夫の儘で、佛を他に發見したとてそれが何で悦びだらう、又何で救はれたらう、それは理想的な佛が此現實へ投影して下さると云ふ丈けで、眞の自分自身の力とはなつてゐては呉れぬ。佛を信ずるとは言へ、佛と我とは別々であり、對立であり相制である。
 ▽眞の救はれは、佛と自分が一如になつた點に在る、佛の心を我心として動くところに我れならぬ我れがある、それが眞の我れであり、佛の有る證據である。まだ我れとなつて居らぬ佛が仕うして佛があらう、それは想像した佛であり、偶像に過ぎぬ。
 ▽吾が物となつた佛であつて初めて眞の佛であり、我れは又佛として復活してゐる、第二の我れこそ眞の佛であり、そこに壞さうとして壞されぬ悦びがあり、崩さうとして崩されぬ價值、人格、生命がある。それが宗教である。
 ▽念佛は其佛を先づ發見する方法であり、又其佛を體驗する方法であり、又其佛を實現してゐる貌である、此生活を離れ此念佛を離れ何處に宗教がある、何處に佛がある、佛は此等生きてゐる活事實である。
 (尅子)

目次

| | |
|------------|-------|
| 第二の我れ | 尅子 |
| 深心に就て反省(三) | 土屋觀堂 |
| 無量化 | 中野尅子 |
| 輪切にした自分 | 大橋登志高 |
| 宗教座談 | 藤井貞邦 |
| 吾朋便り | |

□佛を菊人形のやうに思てゐる、待てゐる内に呼鈴と共に前面の舞台へセリ上て來るやうに考へてゐる。けれどそんな佛なら又呼鈴と共にセリ下つてゆく。單なる客觀だけに生きる人は夢に過ぎぬ。
 □又恐らくそんな人形的佛なら、いつまでも待てゐても出て來ぬだらう、少くとも佛とは主觀を通じて客觀化された實體であり、又再び主觀へ還へさせられ主觀の中に生きる客體である、即ちそこでは主客の名さへも許されぬ唯一勢力である、だから佛をすら認めぬところに本當の佛としての事實が顯現してゐる譯であり、佛教が無我論、無神論に立つ所以はそこにある。少くとも眞實の宗教は斯くなければならぬ。
 □主觀の詰換へ、それが獲信であり、更生である。標準と根據を新しうした主觀の働きが救はれてゐる事實である。だから靜的な對立や力だけでは本當の佛でなく、又救はれてゐるものでない、必ず救はれたといふ刹那は、佛の活動力を自分に貰つたときで、彼を翫賞してゐるといふ態度ではない。
 □美術品でも前に置いて賞美してゐるやうな佛の信仰の仕方なら、享樂主義、概念主義である、佛を見てゐるやうで實は佛を見透して居らぬ、見透した者は必ず彼からの靈化力を感じる、それこそ眞に佛の中心を突いたといふものである。
 □佛に觸れてゐる者は多いが、信仰を得てゐる者は鮮い、信仰を胸に持つてゐる者は多いが、信仰を得てゐる者は少い。
 □自分の懷中で動き出さぬやうな佛なら死んでゐる佛だ、そんな佛なら佛の衣裳だけを仕舞込んでゐるのであり、佛を得たと思つた思ひ丈けを掴んで本物を遁らかして居る、仕うかビチ／＼躍てゐる佛を掴んで振天動地の歡喜踊躍して居りたい。
 □最早凡ての人の中へ佛が入り込んで來てゐる。
 (尅)

深心に就ての反省 (三)

三、罪惡生死の凡夫

土屋 觀道

然に私共には果してかゝる罪惡觀が起り得てゐるでありませうか。若し念佛信者にして此の罪惡が起つてゐないことならばそれは深心の中の信機がないといふことになるのです。さうしてかゝる信機の心のない人は從て往生することのできないといふことになつてゐるのであります。

それは一体何故でありませう、そんなに私共に罪惡生死の凡夫であるといふ感じが起らなくても如來にすがつて念佛さへしたらよいではないかとの疑問も起るでありませう。乍然實際に當つて此の事を味つて見ますれば信機の心なくしては信法に轉することができないのであります。それは何故かと申しますれば私共の心は至誠心によつて眞の向上の心を起し、信機によつて眞に自己の罪惡を知り、信法によつて如來にすがるの心を起し、如來にすがる心を起すが故に初めて如來に南無する事實となり、此の事實が口にあらはれては稱名となり、此の稱名となることによつて私共が如來の御許に往生することのできるやうになつてゐるのが宇宙の實相であるからであります。だからして私共が眞の念佛稱名となつて如來に歸命するといふことのできる前提として先づ私共が自分の機根の眞のつたなさを深く信するといふことは決して無駄な事からではないのであります。さうして又自分の機根の眞につたないといふことを知ることのできるといふことは、即ち自分に向上心のあるが爲めでありまして、又言かへればそれは

私共が眞によくならないと念ずる所の自己の本心が自分の理想に較べて現實にあきたらないからして現はれて來る所の最も進んだ信念の現はれでありまして、之を外から見れば單に自分の行爲のよい方のみ見て、未だ自分の足らない所を見ることの出來ない人々に對して、更に數層の向上であり、進歩であるといはなければなりません。此の點に於て凡そ世に自分のよい所のみを見て喜び自分の足らない所の何であるかをさへ知らない人ほどあはれなものとはありますまい。否、世にはかゝる人に限つて、自分でよいと思つてゐることまでが未だ眞にそれはよいことではなくして、反て自らのあさましき慢心の影であることさへ多いのであります。從て私共が眞に自らを罪惡生死の凡夫であると知りうるといふことは凡夫であることそのことはもとより悲いことではありますけれども、其の凡夫であると自覺し得たことそのことは實に如來への一大轉向の第一歩でありまして、それだけ又自己の行爲を眞面目に反省することのできる丈、以前の人に比べて更に數層の高き人格の現はれでありませう。されば信機に深い人々は「實るほど頭はひくき稻穂かな」との古歌も思出されて、其の人の人格の一層に奥深いことを思いやらるゝのではありませんか。

さうして又此の凡夫としての自覺が必ずしも其の人をして前よりも一層その人を凡夫たらしむるものではありません。否それどころか、ともすれば私共をして、またなき理想に生けるものとして只單にそれのみを以て自らを理想かの如く誤解し、又その理想のみを以て現に自分は之を實現しうるかの如く誤想していた所のものを、一層眞實に其の理想實現の實際問題にまで反省せしめて、而も自分が今尙之を實現し得ていないこと、及び單獨にては決して私共の力では實現し得られないといふことを知り更に進

んでは現在の自己のそれにもまして罪惡生死の凡夫であるといふことにまで氣付いたといふことは、如何ばかり其の人の人格向上の一大轉換として、眞に仕合なことでありませう。

さうして其の人の生活實質の上に於て、その凡夫なることを知らない以前と知つた以後とに於て、いかばかり大なる變化を來たすか知れないからであります。尤も一見すれば未だ自分が現に罪惡生死の凡夫であるといふことを知らない前にも知つた後にも其の凡夫たることに就ては其の實質上何等の變りもないかに思はれます、さうして又一見その人の心の樂しさからいつたならば或は自分がそんな凡夫であるといふことを知らない以前が知つた以後よりも氣樂であつたかも知れません。否或はきつとさうでせう。だからともすれば人は自分のよい所と思ふ方面のみを見て喜び、自分の悪い方面は成べく見ることをしてしないで其の爲めに起つて來る心の苦しさを避けやうとさへするのであります。從て人は往々にして人からの賞讃をのみ喜んで、反て心ある友の箴言も嫌ふことさへあるのではあります。乍然之は私共の最も深く反省すべき所でありまして、眞に自らをして意義あらしめ、ごこまでも眞人の生活に一生を生きやうとする人々には、決して自らの行動を深く反省することを差控ゆべきではありません。從て誰にか眞に理想を求むる限り、また完全ならざる私共に於て此の自己の欠陥を發見せぬものがありませう。此の自分の至らざる所の發見こそ、翻ては即ち自分の罪惡生死の凡夫であるとの實觀であるではありませう。即ちかゝる意味に於て、此の世で最も理想の低いものほど自らの足らない所も知ることのできない人であり、又最嬌慢な人々であり、之に反して此の世に於いて最も理想の高い人ほど自からの多量の足らざる所を知り、又それに對しても、最も謙讓の人々であります言かへれば自己の佛性を認めながら而も之を此の土に如實に實現することの出來ないことを悲しむことのできる人にして初めて眞に自己の罪惡生死の凡夫たることも充分に知ることのできるものでありませう。して見れば此の意味に於て善導が如何に自らの罪になげかれ、いかに其の生死を脱しやうとしてあせられし事よ、思へば導師が自

ら其の經典の何れによつて眞に解脱が得られるのが判らないで、自ら眼をつむつて後ひざりして臧に入り解脱有縁の眞經を授け給へと祚られたその心境は、已に自身は現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁あることなしと歎かれた自力修道の絶望の人として、いかに痛ましい心の叫びではなかつたか、私は又それを法然上人の求道の時代の御心の中にも見るのであります。オウさうして讀者よ、斯く云ふ私は之を亦私自身の心の中にも見たのであります。あさましき己が心よ！私は此のことを思ふ時、轉々人生の悲慘を思はずにはゐられません。靜に思へば世は一面實に闇黒の世界ではないか、世はそらごとたはごまことあることなし、只念佛のみごまことにておはしましける一との親鸞の叫びは決して、彼御一人の心の叫びではありません。信なきものの心の世界それは皆これ闇黒の世界ではありますまいか。否讀者よ、私は思ふ。恐らくは世のすべての人々は確かに此の闇黒の半面である。さうしてこの自己自らの闇黒を知らない限り人は到底如來の大悲に入ることのできないことを。否々或は已に如來の大悲中に照さるゝが故に、その闇黒の影をも知ることができるとあるかも知ぬ。乍然それはともかくとして、自らの罪惡を痛感し、又自らの生活流轉の凡夫であるといふことを知ることが永遠の生命に生き、無限の向上に立つものに於ていかばかり人生の悲しい痛手ではありますまいか。

乍然、讀者よ、私共は果してかゝる意味に於て眞に自らの生活を反省し得てゐるではありませんか、ともすれば如來の大悲、如來の救いといふことに早く方づけて、眞に自らの罪惡生死の凡夫であるといふことを反省することをぬきにしやうとする人が多いではありませんまいか。さうしてそれが多くは眞に自らの向上を誤まり又眞に如來の救済にあづかることのできない深い誤まりであることを知らない人が多いのであります。從て私共が眞に如來の大悲を知らず、又眞に如來の大悲に一切を任かすることのできないのも、要するに此の信機の一點が如來への信法に轉ずることを妨ぐるからであります。人は溺るれ

ば藁でもつかむといはれてゐますが私共の信仰も此の信機の一點が即ち如來の大悲への一大轉向となつて來るのであります。

それにつけても、今私の言はふとするところは決して單なる信機の説明ではないのであります。而してそれは偏へに讀者と共に果して私共は此の意味に於ける信機そのものをそなへてゐるかといふことの反省であるのであります。

然にともすれば私共は此の眞實の反省を怠つて如來の大悲を喜ぶのあまり、自らの凡夫を當然視するの形にさへなります。尤も私達が凡夫であり、不完全者であればこそ、ここに如來の救済もあり又如來に救済せられるの要もあるのではありますけれども、かといつてそれが凡夫の誇りではないのでありませう然るを世人はともすれば自ら凡夫の罪惡をこれは凡夫の持まへだからとじて、少しも反省することなく反てそれを以て自分の誇りとさへするの人はあるのです。乍然いかに凡夫であるからとて、悪いこととするものは悪人でありましてそれが決して誇るべき行爲ではありません。たゞへばそこに多くの毒消の藥りが用意せられてあるからとて何も毒をわざ々々飲むといふことが決して誇りではないやうに、惡事を働くといふことは斷して許すべきことではありません。

加之斯くの如きの心では到底自分の行爲を反省することも出きないのでありますれば自分の行爲の善惡もわきまへず、従つて自分の悪いことにも氣つかねば如來様へ救つていただきたいの心も起るものではないかもしれませんところから、往生の心もおろかとなり、稱名念佛も單なる一つの形式となり終つて眞の念佛とはならぬことになるのです。して見れば本願の念佛に自らのあさましさを知るといふことは最も重要なことの一つに相違ありません。それにつけても私共の日常生活に於ける念佛の反省は果して心からなる罪惡生死の凡夫の反省があることでありませうか。

(八月二十一日夜十時於御殿場大乗寺)

無 量 化

中野 尅 子

宗教は佛と自分との關係の他ないと思ふ、その他は皆これから派生したものが、或は此れの根柢をなすものばかりで、悉く枝末の問題である

佛を信じてゐるといふと親に抱かれてゐるやうな氣になつてゐる、或は佛を抱いてゐるやうな氣になつてゐる、而し抱かれて乳を貰てゐるやうな氣持になつてゐる信仰では、其親に少しでも離れられたら淋しくて仕様がな、又抱いてゐるやうな佛なら、失つた時手持無沙汰で仕方がない、それではまだ本當のミオヤにお目にかかつて居らぬのだ。自分の心の中に親の心が宿され、身の隅々にまで親の身が受け傳へられたとき、本當のミオヤが我が上に復活したのだ。佛に一寸觸れられたといふ程度の信仰でなく、佛の全分が我が上に顯現してゐるといふ自覺でありたい。「入信の刹那から正定聚不退轉の位に入る」といひ「凡夫でなく

て菩薩分だ」といはる、所以でなくてはならぬ、即ち親の意志を祖述し顯彰する信仰であつて、初めて精進成佛の道である。

□ けれど自分の想像だけでは其親の意志——佛のみ心は解らぬ、親から直々聞かされ、如實に體示せられなくては自分に受取れぬ、即ち神の啓示に接し神の御旨を受容れた者でなくては、本當の神はわからぬのである、それと共に自分自身も本當に生きてゐるのでなく、佛と共に死である。佛は自分の意志を衆生に傳へたいが本願であり、衆生はみ心を戴きたいが山々である、此の二の心がハツシとばかり相搏ち相融じたところに、攝取と獲信がある、だから自力ばかりで信心が戴けるものでなく、又小さな他力の仕業でもない、一切を舍む不思議な他力に因てみな催されてゆくものである、だから少しばかりでも現に信仰の方へ傾きかかつてゐるといふ事は、既に其儘大きな佛に動かされてゐる證しである。

如來さまが有難くなつて来たとして、それで如來さまがわかつたのではない。井戸を掘るのに鐵かぶらの先に一寸水が附いて来たとして、井戸が掘れたのではない。そんな處で喜んで了たらそれこそ水の湧きつこは無い、其下もう一つをウンと掘り抜くと、今度は山なす噴水が一度に逃り出る、もう手で止めやうとしても止まらぬ、何物を以てしても塞ぐことは出来ぬ、無限の量が此小さい穴から飛出して来るのだ、不思議といへば是れほど不思議はない、而しよく考ふれば何も不思議はないそれは水脈に掘り當てた丈けた、即ち無限の水が此一小孔へ集て来たから無限井になつたのだ、此小さい五尺の軀に無量壽、無量光を體驗すること此井戸の理と同じである。

井戸に水が湛へられると最早や井戸杵の事なんか忘れて了ふ、即ち井戸は水あるが爲めに井戸の用をなすのであり水の良否に因て井戸の價値がきまる、井戸船がどんなに立派であつても空水では顧みられもせぬ。即ち人間に價値があるのでなく

佛のみ心を内に湛えてゐるか否かに在るのである立派な衣裳や財産だけでは人形に過ぎぬ、佛を信ずるとは此信水を内に湛へ常に新らしく、常に内から湧いてゐるものの謂である。

而し此有限が無限に一致し、一小孔が無量を孕むことは困難事だらうか、困難といへばこんな困難事はない、色々な邪魔物が這入る、易往而無人と歎せられてゐるのは爰である、而し原則としては何處を掘ても水は湧くのである、なんと云ふ有難い味ではないか、何處々々まで行て掘らねば水が湧かぬといふ譯ではない、そんな氣苦勞をしてゐる暇に自分の立てゐる足元を掘て見よ、必ず遅かれ早かれ水は湧くのである、何も人の眞似をして其場所まで行て必ず其處を掘らねばならぬといふものではない、即ち入信の路は多々ある、佛教でもキリスト教でも天理教でも金光教でも、自分々々の縁にまかして一刻も早く仕事にかかるとだ、或は又佛や極樂を一定の彼方に求めず、自分の立てる身の周りから見廻すことだ、すれば其

足元身の周りから一切が現れて来る、即ち既に大水脈の上に立て居る事を知らずに水は彼方にのみ湧くものだと思てゐたのだ、既に救はれて居り乍ら救はれるのは遠い先のことだと誤信して居たのだ、救はれてゐたのを如實に救はれてゐたと知るのが救ひであり、將來への救はれである、湧くがまゝに水を湧かす、これほど平凡な事はなく、これほど自然なことはない、それが信仰だ。

富士山の頂上から井戸を掘らうとしてせつせと働いてゐる者がある、それでも嗤ふな、屹度湧くのである、現に湧いてゐる。或は巖盤の上で勤めてゐる者がある、それでも嗤ふな、必ずやいつかは掘り抜くときがあるだらう。嗤てゐる者より働いてゐる者には望みと希びがある。而し大水脈を得るのに富士山の頂上や巖盤上を選ぶより、より良き處を研究し且つ得たのならば故らにそんな處で試掘する必要はないと思ふ、即ち先づ手を下す前に研究選擇すべきである、研究とは何か、曰く先哲の指示、先驗の言に聽くことだ、然しその指

導が直ちに水でもなく、又水を得る方法でもない方法は其先人の言を此五尺の軀全自己の上に應用することだ、爰に研究者への大きな謎がある。冷暖自知といふ、自知だけでも尙ほ水でない、水を見ただけでも水でない、水になつたとき、井戸が水の用をなすとき井戸の用をなすのである、井戸と水とを離して人も見ず、又自らも思はぬとき、井戸の更生であり、水の復活である。佛を信じてゐると思てゐるとき既に「思ひ」に墮ちてゐる、即ち自分も概念に生き佛も概念として生かされてゐるだけだ、兩者の死である、眞に佛が自分の奥となり、佛の力を我が力とされたときのみ佛も生き自分も生かされてゐるのである、此自分の力となつて居らぬ佛なら幾ら完全な佛でもそれは他人の佛である、理想も現實の上へ頭を出して居るのでなければ空想である。

輪切にした自分

大橋登志高

私の現在を見返ると、仕事はないかと血眼になつてさがしてた時の方が緊張してたし尊くもあつた様に思はれる。如來に會はねばならぬと思ひ鬼に會つて笑ひ合はうと思ふてる時が一番眞剣である。如來に會つたと思ふ時が一番危険であるが然し如來に救はれると云ふ氣分は忘れてはならない。聖法然も「源空はすでに得たる心地にて念佛す」と云ひ、又他に蓮臺に乗るまでは心配だからお念佛すると云はれてる。此の二の矛盾が寄り合つて一本の繩となつた處に私の手本とする大切なものがある。私は時々禮拜儀を讀む、處が完徳の鑑たる世尊に倣いて如何なる境遇にも姿色を換へざることを誓ひ奉るの一句の所でハタと行止まる。厚顔の私も此の誓が言へない、人一倍短氣な私は此の句がなければナと思ふことさへある。仕事のない時から仕事にありついた今ではもう無職の時や、震災に赤裸々になつた苦しさ胸に浮

んで來ない。浮ばせ様と玄米喰つても腹の中でゴツゴツして居るだけ何の感じもない。之は苦しさの本心からの叫びでなく借りものであつたからだらう。信仰でも生活でも借りものである。内はそれが皆死んで居る。まして仕事があればこれと増してくと忙しい中にも何處かに弛みが出て居る。それも知らない裡はいゝが知つて見ると恥かしくなる。歡喜は活動の匂ひである、深い自己を現はすと云ふことが眞の活動である。深みのない所に活動はない。そこには空虚が巢くつて居る、そして私の今の生活はと見返ると悲しい。

安價な信仰生活者や上迂りした樂天主義者利那的享樂主義者に信仰の眞の味は知れない。やはり苦痛を透して十字架上の苦しい杯にふれたものゝみが蜜の味を知る。だが苦味と苦味の中に蜜があつたら一層美味さが知れやう。如來に抱かれた人がミオヤに暫くでも別れると一層深い淋しさを知る。だが其後にミオヤに會つたらその時こそ佛の慈悲が一番ハツキリしてくる。それなのに私は何うだ、私は尙ほ習慣で祈つて居る

自分の祈禱は神に通ずると云ふ希望はなしに、少しでも恩寵の扉を叩けばスグに見出されると云ふ此の近づきを長い間求めて來た。だが本當云ふと私はその扉が開かれて十字架上にかけられた彼れが自分を呼び込んでくれたも私は嬉しくなかつたであらう。それ程私の求める力は弱い、そして弱いのを悲しみもせなかつた。然し私は今少し佛の有難さを知つて來た。そして今生活とは我々が未だ生れない以前に犯した罪の懲治監であるまいかとも思はれて來てる。眞實は自分に働いて喰ふ味を覺えかけた今では宗教學的概念論に左右されることが出來なくなつた

異端視され乍らも自分の生活に不満足な満足をして働いて居る。友が人間は食氣と色氣と睡氣と遊び氣との外はなにもない、俺は子供の守をして居るが人つて何にか一つの守りになつて居るだけでないかと云ふ。私も少しつゝ、そうした氣持がして來かけた。そして百姓が一番いゝナと思ふ。然し自分の弱々しい身體や手を見てあきらめる。念佛の力が私の心から身體へ少しつゝしみ込んで行く様にも思へる。私を輪切にしても未だ出るものは血のみだ。お念佛がしみて居るかしみてないかは佛様のみが存じて見へるそれはいゝのだ。

宗教座談 (二)

(唐澤三昧會中に於て)

藤井貞邦

或宗の僧侶は多くは「其儘でよいそれが本性だ」と諭すのです。自分の子の放蕩にも親はそれで

よいと諭すのでせうか。本願の念佛はそんなものではない。

△「念佛をはげんで申すと自力念佛になりますか眞宗では之を非常に忌むやうですが。」

上「親鸞上人が珠數を爪繰つて居る繪像があります、上人も盛に念佛されたものでせう歎異鈔に「親鸞におきてはたい念佛して彌陀にたすけられ

まいらすべし云々」と云つてではありませんか。念佛しての語を見落してはなりません。眞宗は吾人の淺ましい處を見せて呉れる長所はあつて念佛申すと自力だといふて悪くいふが親鸞は和讃に「彌陀の尊號となへつゝ信樂まことに得る人は憶念の心常にして佛恩報する思あり」と云ふてゐられます。今時の眞宗は旨い物を食はせないで旨がらせようとするのだからむづかしい。

小「上人の入信せられた時の念佛の當體はどんなものでしたか。

上「心から宇宙の絶對に歸命し切つた姿です。その時は題目でも南無大師でも言葉はどうでもよかつたのです。眞宗の和讃には稱名念佛といふ言葉が幾十ヶ所とあります。私のは淨土宗でも眞宗でもない。宇宙唯一の絶對なる彌陀教です。△「同じ救かるなら念佛せないで救つたが得得せう。努力するのは疲れますもの。

上「支那人が擊劍を見て「つまらぬそれよりねて居る方がよい」と云うた。しかし擊劍の好きな人

は打たれても痛くてもやめられぬ面白味を知つてゐるのです。「そんなにつめて念佛申さねば助からぬ宗旨なら私は眞宗に行きます」といふ人はこの支那人の仲間です。一刻も早く別時が要らぬ様になる爲めの別時です。行住坐臥すべて念佛になる様に。

小「人間に佛性があるのになせ善惡がわかれるのですか。

上「佛性は自性を守らずで天地の眞理であるが鬼とも蛇ともなる佛になるには佛になれる方法を探らねばならぬのです。

都「お念佛をいくら申しても有難くなりませんがどうしたものでせうか。

上「本當の念佛でないからです。南無する心がないからです。私も初は彌陀の存在を疑つて居ました尤も釋尊が信じて居たのだから多分有るのだらう位には思つてゐましたがそんな程度では噂話ですわね。アツ鳥が鳴いてます。あれが不思議ではないですか、あなたが生れて來てそして口をきくそれが不思議ではないですか。私の聲

があなたの耳へ入つて其意味がわかるといふのも不思議ではないですか。大空に大な燈が輝いて居るのも不思議ではないですか。世にはそんなことはあたり前へではないかといひ、又之を直に生物學的或は天文學的に説明して得々たるものがあります。乍然それは單なる説明に過ぎません。私の云ふところの其の不可思議は尙その物理學的生物學的若は天文學的世界觀の奥底に横はる宇宙生命の不可思議境を云ふはうとするのです。

△「この時私は時々思ふたことを思ひ出した。『そんな事は當り前の事ではないか不思議と思ふのが却つてどうかして居るのだ、さういふ事のあるべき宇宙なればこそ人類が發生し生存して行くのではないか。因果を轉倒するから不思議にも思ふのだ』と考へて居たのだ。ところが今になつて見ると轉倒だらけの私であるからさうした考も味つて見ねばならないのである。都合のよい時ばかり當り前といふて居て失敗だの病氣だの苦しい目に會ふと泣いたり怨んだりして當

り前だと澄まして居れない程片寄つた倒まの私だから……」

上「繰返し／＼唱へて見たが一向味がないと云はれるが味があつたではありませんか味がないといふ味があつたでせう。そこで質問となり食ひ方や心の持方の誤もわかつたと云ふ事は大きな經驗ではありませんか。初めから唱へても見ないでどうもないと云ふ人の言葉とは違ひます。吾々は子供のやうな冒險家であつてこそ大なる眞理が得られるのです。念佛修行は自轉車の稽古をするやうなものです。やつて見てもなか／＼乗れないが時々ヒョイと乗れる事がある。さうして居る中にだん／＼上手になる様に念佛して居る中に時々南無出來る時があるそこが手がかりでだん／＼と信仰が進むのです。疑の雲が全部晴れてから信仰に入るのではありません。信仰の火がついた上はたとへ線香の火位でもそれだけ明るいのです。疑ひながらも「マア唱へて見ようか」位で唱へたのでもやはり信仰心からだ云つてよいのです。

「お別時に引張られて来て見たが何度も頭ばかり下げて第一衛生よろしくない余り馬鹿らしいから歸らうかと思つたこともあつたが、今日は大變に有難かつた」と藤村さんが喜んでのお述べでした。その位の勢でなくては確信は得られませんね。

長「私は内からの要求と外からの要求との衝突に苦みました。初の間は外からの要求を打破つて内からの要求を貫いて行けるものと思つて居ましたが、どうも駄目だと気が付いて廻れ右をしました。それが寂しいのです。しかし其寂しさの中から嬉しさが出さうです。私は宗教によつて此寂しさを打破るか又は嬉しさを絞り出すかしたいと思ひます。

上「あなた本當に廻れ右をなされたのですか、トルストイが汽車で旅行した時大勢の農夫が同じ車に乗り込みました或驛に著くと兵士がドヤ／＼乗込んで前の農夫を追立て、自分共が腰を下した。次の驛に著くと今度は別の兵士が乗り込んで前の兵士を下車させました。トルストイ

が之を見て自分は「我宗教」の中に「汝等惡に敵する忽れ」といふ絶對無抵抗主義を主張して居るのであるが我が愛する農夫がかうした亂暴者に抵抗する事が果して許されぬことであらうかと煩悶して雪の中に倒れたといふ事です。私はこのトルストイに對して尊敬と同情とを禁じ得ないので。あなたが全く廻れ右をなさつたなら自滅の外ありません。社會の惡魔は益々あなたをつけ込んで食ひ殺さねば止みません。あなた一人はそれでよいかも知れぬ。しかしあなたも其實全人類の欲する處を欲したのでせう。廻れ右退却は或處までいす。何時かは敵をも光明中に攝取せねば止まぬといふ處に大なる生活があるのです。

長「退却して一時は灰身滅智の様になり衰弱もしましたがその中に浮かび上る様になり苦しい中にも躍進するやうな氣分が起つて居ます之は私の運命として避けられぬものと思つて居ます。

(續く)

吾朋便り

□ 病床より。藤田うの子様

南無阿彌陀佛御上人様其後御無

沙汰申上ておりました。御機嫌美

しう秋晴の心地よい昨日今日尊き

御教化を此地に遊して頂いて居り

ますと存しましては御直に御聲に

ふれませんが毎日心強うお懐し

くて御姿を思ひやつて居ります。

春の時にはほんとうに残念に存

じました。今日ではもう及ばぬ事

と昨春四月一日よりの一週間の尊

き有難き御導きを私にとりまして

は又と逢ひ難い値遇佛とも申上ま

せうか、若し只今の私が四月以前

の私でこんな病床に有つたと相像

いたしますと實に／＼身の毛もよ

立つ思いが致します。もう何とし

ても限られたる命一年有半か二年

か或は半歳の後に逼つて居るかも、又十年命を延べてやると仰知れませぬと病勢の進行より考へせられても恐れもせず病苦に出来ましては自分でも覺悟いたして居る限りは打勝て行かれさうで御

座います。御上人様こんな心ちで宜しう御座いませうか。先月の今

頃は右腎臓が全く侵されて用をな

さないから比較的健全な左を残り

て右のを取り去ります手術を受け

ますのが眞實に生きる道だとも存

じました處が好い筈の方もあまり

に頼りにならぬ事を昨今發見され

まして苦痛をしてまでも無駄であ

りますとの意見が多くなりましたし

然今一應最後の驗鏡で決定いたし

ます事に成りまして御座ます。私

にとりまして入院當時から全部い

けないものと覺悟いたして居りま

したから中頃左だけでも生きられ

たと先生方も力を付けて下さいま

すので手術も受けやうと決定いた

しました丈けで今更いけないと仰しく存じます。かくて此のまゝ最口神戸 足利 秋子様より
 られても悲しみも落膽もいたしま 後の一日まで退轉なく向上道に御
 せぬ。如來様に御任せ申上げてか 導き頂き度う心より願ひてなりま
 れこれと心配なごいたしませぬ、せんで御座います。

御育をば有難く、感謝いたしま 口尼崎市 橋本政一様

す。先日までは一日も早く退院し 春去り夏過ぎ思案するに尤も好都
 て心ゆく計りお念佛も申させて頂 合の時節となりました。御上人様
 きたいと存じて居りましたが此頃 私には御上人様によつて確に救はれ
 ず。先日までは一日も早く退院し 春去り夏過ぎ思案するに尤も好都

亡き子のすがたかまざりと見ね した心のうかびましたまゝ歌に
 なつておりませぬが

では弟の絶えず持ち呉れます美 した一人で御座ます。一昨夜圓平寺
 い花を眺めては如來の表はれと合 様が突然私方に御出掛け下さいま
 掌の出来又院長様や主任の先生 のして御上人が来る二十日には圓平
 心からの御親切看護婦さん方の た 寺様へ業々御足勞下さるとの御知
 れもが好くして下さいますのも 何らせで御座います。私の小さな胸
 時も心の中でお念佛を申させて 頂は高鳴しないで居られませうか。
 いて居ります。聲に出さずとも 痛より以上認むることは蛇足を書
 みが去つたと云つてはお念佛の 申の感が致します。此度こそは御上
 され食事が味よく頂けましたと 人様の御人格を通してきつと此迄
 一々感謝の出来るやうになりま したと異つたより偉大なるものをし
 て御座います。知らず、念佛生 かりと推らせて頂きたいと祈つて
 活ができて来さうでほんとうに 嬉止まれません。

法の師の深きめぐみのおしへ にて亡き子菩薩に見ゆる嬉しさ
 御上人様、亡き子といかなる御 因縁か今年の五月の御別時の時丁度
 百ヶ日にあたり入信させて頂き 又死ぬ七日程前私に母ちやん五月廿
 七日をよくおぼえて居なされと申 された其日にあたり別の世界を見
 る事が出来それより半月程する 空に三味佛をおがみ今度の御別時
 に命日がたり常に亡き子の云う 居たあの月かげの御歌を頂き偶然
 とわ申しながらあまりの不思議 さに喜ばすにはあられませぬ。

◆道友の方々へ、觀道より

皆様お變りも在りませんか、
 この私はふつゝか乍ら皆様を心に
 浮べて遙かに御慕ひ申てゐます。

殊に近頃は「阿彌陀佛」とそむる

心の色に出でば秋の梢のたぐひな
 らまし」の宗祖の御歌も思出され
 て、自然に深み行く秋の紅葉がミ
 オヤの慈光そのまゝに顯はれて、

今更らのやうに宗祖上人の御心が
 懐しくてなりません。七百年も昔
 の上人が今更らのやうに懐かしい
 とはまことに有難いことです。而

も私の心が日にまし宗祖の御心に
 直々に接近するの喜びは近來にな
 いのどかな心の樂しみであります

而もそれと共に故辨榮上人や觀
 秀老師の溫容も更に一層に親はし
 く味はれて心から涙ぐまれる時

が折々であります。神戸では兩親 其の不徳を謝せざるを得ないので

の厚恩に泣きました。それにつけ ず。乍然友よ、喜んで下さい、近
 ても久しく御目にかゝらぬ法の友 頭の私は實に近來にない晴々した
 人よ私はかうして皆様を慕つてゐ 心の持主で居ります。私の一家も

ます殊に念佛の中に如來大悲の慈 慈光の中にそれこそ近來にない健

光を仰いで遍ねく一切の道友を 康の中にあります。心よりかしづ
 ぶ時一度でも御目にかゝつた道友 きくれる妻の心は言はずもがな。
 の如何に懐かしいことよ、今も尚 愛の姿はそれこそ謂い知れぬミオ

昔のまゝの親しい友はいはずもが ヤの賜として感謝せずにはあられ
 な離れ行く道友の心の底を思ふて ません加之去六日から、恰も陣頭
 は謂知れぬ心の淋みさと共に私の に立つ勇士の如く湧きかへるやう

不徳を謝して遙に其の人の幸福を な血潮の中に法戦に出かけた私の
 祚らすにはあられませぬ。私の事 昨今はそれこそ譬ふにもなき喜
 に關して時折り惡罵までしてある びの絶頂であります。到る處道友

く人々のあることは如何なる深き の歡迎と献身の求道とは此の私を
 メグミの其の奥にひそめるかは知 して無限向上の一路に益々根強く
 りませんが、日夜に過ぎ行く上な 立たしめていたゞくことを喜ばず
 き自己の生命を私の爲めに失はせ にはあられませぬ靜岡でのミノリ
 つゝあることを思へば一層心から の會は初めての集りでしたが何だ

か百年の知己に接した喜びでしたものはありません。到る所これ又七重様、全田代なほ子様、全小川清水での會合は力の喜びです。行力の充實であります。願くは私のすみ子様、全小池きよ子様、全角基寺での念佛は大なる自然と友で心からなる道友の方々により如來田妙子様、全林東明様、田中大眞した。朝夕の景色も淨土の莊嚴さを中心とせる眞の生活を共にい様、小川源五郎様、全藤橋重道様なからでした。道友の喜びはもとたさうではありませんか。非人格全石倉玉子様、全秋田芳一様、全よりです。四日市での集りは親友なる小人のたわごとにより耳かさずた勝地近太郎様、全辻儀様、全鈴木中野氏の靈前に今昔の涙にくれまゝ一直線神人の生活にいそしみま成春様、全杉山彦太郎様、○金貳した、氏が今生きていたならと思せう。終に未だ一度も御目にはか圓堀田きよう様ふことは山々でしたが、限りなき、りませんけれども此の書の愛讀慈光のもとに舊友の心を温めたこの方々にも心からなる感謝と敬意とを感謝せずにはゐられません。を表します。(二〇、二六)

寄贈並誌料拂込芳名

寄贈の部
神戶の集りは近來にない會心の集りでした。惡魔の巢くう寸隙もない純信の友の求道は心からなる道友の光であります。大阪での集りも近來にない盛會です、晝は一般の信者の集り夜は尼僧道友の集りです、それにつけてもあゝほんとに如來を中心とした献身の叫びほど人を動かし又自からを動かす

- 定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社
東京市芝區芝公園第十四號地九番
編輯兼 土屋 觀 道
發行人
東京市芝區芝公園第十四號地九番
發行所 眞生社
東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷人 三井 清 次
東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷所 玄々堂 印刷所